

# ケイのがっまっ

ケイのがっまっ

## ケイのがっこう

### 登場人物紹介

- 第1章 清掃委員シバ
- 第2章 自分を責めやすい、スイスイ
- 第3章 何でも人のせいにしてしまう、ガイマ
- 第4章 性格を直した、トウアール
- 第5章 夢を持ってない、ハレ
- 第6章 満点以外受け入れられない、キベル
- 第7章 人の顔色が気になる、ミド
- 第8章 コミュニケーションをあきらめた、ロゼッタ
- 第9章 負けるのが嫌いなパディン
- 第10章 理解されないクラウス

85 77 66 56 42 33 27 20 12 3

## 登場人物紹介

ケイ・・・ダンケ学校の教師。さまざまな経験から子どもたちに平等に、多種多様な事柄を教える。

ミド・・・ダンケ学校の生徒。賢く機転が効く。人のパーソナルスペースに土足で踏み込まない。

シバ・・・クラスの清掃委員。きれい好き。少し自分の意見を押し付けがち。

スイスイ・・・自分より他人を思いやる優しい子。

ガイマ・・・全てを他責にする。だが悪いやつではない。

トゥアーリ・・・クラスのムードメーカー。ちよつとずさんな性格。

ハレ・・・クールビューティ。歌手になる夢を持っている。

キベル・・・勉強していい会社に入ること为目标としている。

ロゼッタ・・・人とあまり積極的にコミュニケーションを取ろうとしない。

パディン・・・人に負けるのがとにかく嫌い。負けることを恐れている。

クラウス・・・哲学的なことが好きな少年。

## 第1章 清掃委員シバ

### 教室の汚さが気になる

ここはダンケ学校。小さな村にある学校なので、全校生徒は十人しかない。みんな大体6歳〜10歳くらいの子どもたちである。

その生徒たちをまとめるのが、教師のケイである。髭を少し蓄えた青年で、30代の後半といった風貌だ。

とても優しい目で、笑うとニカッと白い歯が覗くのが特徴的であった。

今日はケイのクラスにいる、シバという女の子の話である。

シバは教室の整理整頓、掃除を指揮する清掃委員の係を担当していた。

とても細かく他の生徒たちにも指示出しをしており、少し口うるさいくらいであった。

そんな細かいシバに嫌気がさした他の生徒は、シバの陰口を立てることもあった。

「別にそこまで厳しくしなくてもいいじゃないか」

「それって、シバちゃんのこだわりなんじゃない？そんなこと私たちに押し付けられないでよ」

ケイは他の生徒たちがそんな風にシバのことを言っているのに耐えられなく、放課後少し、シバと話をしてみるのであった。

## 二人で話してみる

「シバさん、最近はどう？学校は楽しい？」

ケイはさりげなく近況を聞いてみた。それに対してシバは、

「全然楽しくないよ。みんな私の言う事、全然聞いてくれないんだもん。どうしてみんな私の言う事、聞いてくれないんだろう」

と、不思議がり、かつ怒りを感じているようであった。

「たとえば、どんな事で、みんな言うことを聞いてくれないんだい？」

ケイは質問を試してみた。

「たとえば、教室の後ろにロッカーがあつて、そこにかばんとか置いてあるでしょうか？」

そのロッカーの上は整理整頓のために、何も置かないようにみんなに言っているの。ロッカーの上にものがごちゃごちゃとあつたら、汚いし、気分悪いでしょう？

でもみんな、ロッカーの上に、私物をどんどん置いてちゃうんだよね。置いてあつたら注意したり、張り紙まで貼つたのに、本当にみんなは掃除ができないダメな子達なんだよ」

シバは呆れ返つて、ぶつくさと文句を言っていた。

「まあ確かに、みんなが自分の言うことを聞いてくれないと、腹が立つよね」

ケイは一旦、シバの言うことに同意した。

「そうでしょう？私の計画は完璧なのに、従わないみんなが悪いのよ。だから、先生。教室が汚いのは清掃委員の私のせいじゃなくて、言うことを聞かないみんなのせいだからね」

うーん、これは参つたな、とケイは思つてしまった。

こういったケースは大人でもよくある。自分はやるべきことをやっているのに、それに対応しない相手が悪いのだと。自分が正、相手が間違いとなってしまうと、もう交渉の余地は無くなってしまいうのに、それがわかっていないらしい。

ただ、ここで、「相手の気持ちを慮ろう」とか「相手の立場になってみよう」などと言っても、無駄であることは、ケイの経験上察せていた。この場合、自分の思いが強すぎてしまって、一步相手に譲ろうなどという考えは出てこないのだ。

## 他の生徒からの意見

そこに、校庭で遊んでいた、他の生徒である、ミドが教室に入ってきた。

「なに、二人で話してるの？」

ケイは答えた。

「うーん、別に。ちょっとお話しているだけだよ」

「ふーん」

ミドは非常に賢く、物事の本質を捉えるのが上手な子というのが、ケイの印象であった。だから、気にはなりつつも、相手が嫌がることは深く踏み込んでこない。そういう良識もある子であった。

「ちょっと、教室の掃除のことについて、話をしていたんだ。シバさんは色々とみんなに声掛けしているんだけど、なかなかみんなが協力してくれないってね」

ケイは少しぶつちやけるつもりで、ミドに打ち明けてみた。すると、ミドはこう言った。

「いや、シバちゃんの言う事は正しいよ。そりゃあ、教室がきれいな方がいいに決まっているし、それはわかっているんだけどさ」

「わかっているのに、なによ」

シバは少し責めるような感じで、ミドに問いただした。

「いや、はっきり言ってめんどくさいんだよね。僕なんか特にめんどくさがりだし。ロッカーの上が空いているんだったら、そこに置いちゃった方が楽だし、ついそうしてしまうんだよね」

「それはつまり、悪気があってやっているわけじゃないんだよね」

ケイはミドに助け舟を出した。そうそう、とミドは答えた。

「でも悪気がなくても、汚くしているのは事実でしょ？」

「まあ、そうなんだけどさ」

そこでもうミドもギブアップだった。そう、正論は正しい。と言うよりも、正論を覆す方が難しいのだ。正論の一本槍で来られてしまうと、このように、反論ができなくなってしまいか、それか自分なりの正論で喧嘩になってしまいか、どちらかしかないのだ。

かといって、相手の正論に服従してしまうと、自分がやりたくもないことをしなくてはいけないようになってしまう。それに服従してやったところで、腹の奥底では納得していないから、クオリティは下がるし、少し時間が経ったらまたやらなくなってしまう。

## まずはみんなに現状共有

そこでケイはシバに提案してみることにした。

「シバさんはいつも教室を綺麗にしようとしてくれて、本当に助かっているよ。でもみんなも忙しい、不得意な人もいるから、完璧にピカピカしておくのは、なかなか難しいのかもね」

シバはうーんと唸り、

「確かに、これだけやってもみんな聞かないんだから、みんなにはもう無理なのかもね」

と、諦めた口調で言った。

「でも私の性格かもしれないんだけど、汚い教室で勉強するの、本当に嫌なのよね。勉強に集中できないし、気持ち悪いし・・・」

話を聞いていくと、どうやら清掃委員としての役割もあるが、個人的な性格として、散らかっているのがどうしても気になるらしい。

「かといって、シバさん一人で教室の掃除を毎日するのはしんどいよね」

「そうね、私一人では嫌だし、みんなの教室だからみんなも掃除してほしい。

私がちよっと神経質なところもあるかもしれないけど、もう少し教室は綺麗な状態にしておきたいな」

そこでミドは言った。

「わかったよ、クラスのみんなにも明日その話をして、シバが教室の汚さが気になっていることを、教えてやるよ」

「そうだね、みんなにも共有して、みんなの教室だからもう少し整理整頓をするよう、声掛けしていいよ」

それでこの話は一旦終了した。

シバとミドが教室から出て行って、一人になったあと、ケイは考えていた。

## 同じことの繰り返し

今後どうなるだろう。おそらく一時的にはクラスのみんなは協力してくれるだろう。

しかし残念ながら、また教室は段々と汚くなっていった。シバがイライラし出して、また同じような話し合いが持たれるであろう。

抜本的な解決策はないのだろうか。今回はこどもたちの話であったが、本当にこういう話はコミュニケーションの中でよく発生する。

誰か一人がそのコミュニティのある部分の改善を申し出て、他の人たちも一旦賛同するが、じきにその効果が薄れていく現象だ。

ただ、人はそれぞれ違う。同じ人はいない。違いすぎるとなんとかお互い歩み寄ろうとしても、じきにまた離れていってしまう。

そこにはやはりミゾミゾとなる何かが必要なのだ。教室を汚くする子どもたちにとって、何かミゾになることがないと、継続しない。ではそのミゾはなんなのか。

そのミゾはまだなにか見つかっていない。それに、もしかすると、シバの方が先に折れるかもしれない。人間社会はかくも難しい。そして意見や感性が違うもの同士のコミュニケーションは、非常に精神力を消費する。ケイは少しため息をついて、職員室に戻るのであった。

## 第2章 自分を責めやすい、スイスイ

### すぐに謝るスイスイ

スイスイは、特に自分のことを責めやすい女の子であった。

なにか友達と口論になった時も、すぐに「ごめん」と謝り、その次には「私が悪いから・・・」とその理由を全部自分のせいにするのであった。

スイスイが、相手のことを責めたり、自分は悪くないと主張することはなかった。だから学校のみならずスイスイのことを、とても優しい女の子と認識していた。

しかし学校の教師であるケイは、少し気にかかっていた。客観的にスイスイと、クラスの子どもたちとのいざこざを見ていても、スイスイが一方的に悪いケースは一度もなかった。

なんだかスイスイは本当は自分は悪くないと主張したいのに、我慢してしまっているのではないか、そう心配したケイは、放課後に、少しスイスイと話すことにした。

## 無理をしていないか

「スイスイ、どう最近は？元氣？」

またいつものようにさりげなくスイスイに、最近の様子をケイは聞いてみた。

「もちろん！毎日学校楽しいよ。お友達も優しいしね」

そうスイスイは笑顔で答えた。そこに無理をしている様子はない。杞憂だったのか、そうケイが思った時であった。クラスの清掃委員でもあるシバが教室に入ってきた。

「忘れ物しちゃった。私としたことが、ちょっとお邪魔するわね」

そういって、ずかずかと、シバは教室に入ってきた。

「なに、話しているの？」

そう聞かれたシバに、ケイは

「ちょっと最近の様子を、スイスイに聞いているんだよ」

と答えた。

ふーんと言ったシバだが、その後に出てきた言葉に、ケイは少し驚いた。

「それにしてもスイスイ。私、前から思っていたことなんだけど、あなたそんなに謝らなくていいと思うわよ」

それはケイも同じく考えていたことであり、今回の話の主旨になる部分であった。

「え、そうかな。私はあんまり意識してないのだけれども」

そう言うスイスイに対し、シバは、

「なんだか私が見ていても、それはスイスイが悪いわけじゃないよね、と言う時もすぐスイスイは相手に謝るから、なんか無理してないのか、心配になるのよね」

と、ケイも同じことを考えていたことを言った。やはり子ども同士でも気づいている子は気づいているらしい。

「そうかな、ありがとう。ちょっと気をつけてみるね」

笑顔でスイスイは答えた。本当に無理はしていないのだろうか。心配は残ったままだったが、その日の放課後の話はそれで終わった。

## 怒られたくない

スイスイは昔から、あんまり自分に自信を持っていなかった。周りからどう見られているのかがいつも気になっていた。それは性格か、外からの影響でそうなったのかはわからないが、そういう性格になっていた。

だから、相手から強い口調で反論されると、すぐにそれを消火すべく、まずは謝罪して相手の怒りを鎮火ちんかすることに集中した。

それで相手の怒りは収まるのだが、やはり個人的にはもやもやしていた。どうして自分が謝らなければいけないのだろう。今日、先生とシバにも言われたが、やはり自分が悪くない時は反論してもいいのではないかと思えてきた。

でも怖い。相手と口論して相手の怒りを買うのが怖かった。どうしよう、どうしようと考えていて、結局その日はあまり眠れなかった。

## 少しの勇氣

次の日の学校で、スイスイは寝不足で機嫌が悪かった。でもそれは外にはおくびにも出さない。クラスみんなが気分よく過ごせるよう、いつものように十分配慮しながら授業を受けていた。

それでもやはり寝不足でイライラしていた。

そんなとき、クラスのボージュが授業を聞きながら鼻をほじっているのが見えた。

スイスイはボージュのことがあまり好きではなかった。ボージュはだらしなく、身だしなみもお世辞にも綺麗とは言えず、いつもボーとし、鼻水を垂らしていることもある男の子であった。

スイスイは、綺麗好きで汚いものが大嫌いであった。クラスのシバもスイスイのように綺麗好きであったので、よくボージュはシバに怒られていた。

あなた、鼻出ているわよ、鼻をかみなさい、とか。

鼻をほじらないでよ、汚いでしょ、とか。

咳をするんだったら、マスクをしてよ、とか。

スイスイが心で思っていると言えないことを、シバはズケズケと言うことができ、実はスイスイはそんなシバのことをうらやましいと思っていた。

しかしそんな頼りになるシバも、今日は学校を休んでいる。なにか家庭の事情らしい。だから今日のボージュはやけに生き生きとしている。いつも口うるさいシバがおらず、羽を伸ばしているようだ。

それにしてもボージュが鼻をほじるのが気になる。汚い。やめてほしい。そんなとき、昨日のケイとシバからの言葉が頭に蘇ってきた。

「別にスイスイがそんなに謝らなくていいんじゃない？」

そうか、別に自分が悪いわけではないんだから、ただ単に嫌だと言えればいいんじゃないか？ 寝不足で頭の状態が少しいつもと違っていたからか、今日のスイスイはいつもと違っていた。授業が終わった後、スイスイはボージュの方に向かって行った。

「ねえ、ボージュ」

スイスイはボージュに話しかけた。心臓がバクバクと脈打っているのがわかる。緊張して、顔が赤くなっていたかもしれない。でももうスイスイは、自分の気持ちを伝えようと、決心していた。

「なに？」

まだボージユは鼻をほじっている。そんなにほじって、鼻血が出ないのだろうか。

「そのー、そんなに鼻をほじって、痛くないの？」

本当は、鼻をほじるのやめてよ、汚いから、と言いたかったのだが、いきなりそんな飛び級はスイはできなかつた。非常にオブラートに包んだ形で、まずは鼻をほじっていることに触れた。

「んー、別に痛くないよ、ていうかそんな気にしてほじってないし」

「ふーん、そうかあ、そうだよねえ」

スイスイは一旦ボージユの言葉を受け取った。そして続いてこう伝えた。

「なんか私の意見で申し訳ないんだけど、鼻をほじると鼻の粘膜を痛めるから、やめた方がいいんじゃない？」

だいぶ、遠回しに言っているなあと思いつつ、スイスイは伝えた。本当は鼻をクラスでホジホジするのをやめてほしいのだ。

「あー、そう？わかった、きをつけるよ」

そのボージユの反応に、スイスイはびっくりしてしまった。鼻をほじるのをやめてくれた。夢のようなきょうが起きた。

この日スイスイは非常にワクワクした気持ちで家路についた。自分の言葉によって世界を変えられた。今まではグツと我慢して堪えることしかしてこなかったが、勇気を出して飛び込んでみたら、不完全な状態にも関わらず、相手の行動が変わった。

これは大いなる発見であった。今まではしようがないかとあきらめていたが、勇気を出して飛び込めば、変わることもあるということを知った。

スイスイはこの日、なにかしらの手応えを掴んだのであった。

### 第3章 何でも人のせいにしてしまう、ガイマ

## 何でも人のせいにしてしまう

ガイマは他責思考の強い男の子であった。なんでもかんでも人やもののせいにしてしまう傾向があった。

なぜ今日は遅刻したのか、と聞くと、昨日母親に勉強させられて寝るのが遅くなったと言う。どうして宿題を忘れたのか、と聞くと他に考え事をしていたから、と言う。

ああいえばこう言うではないが、素直に自分の非を認め、謝るということをしない。それはよくないことではないかとケイは思い、放課後にガイマと話すことにした。

## 他責思考たせきしこうと自責思考じせきしこう

「ガイマ、今日呼んだのは他でもないんだけど、、、君の態度についての話なんだ」

「態度？何か僕に文句があるっていうこと？」

すでにガイマはケンカ腰だ。切り出し方が良くなかったか。ケイは反省しつつも言葉を続けた。

「そう、態度だ。君は注意されても、自分のせいにせずに、他のことの責任にするだろう。お母さんのせいとか友達のせいとか。あれはよくないと思うな。まずは謝るということをした方が、君にとってもいいことだと思うよ」

それに対しガイマはケイに向かってこう言った。

「それはケイ先生の感想でしょ？僕は本当にそう思っているから言っているだけで、勝手に僕の責任にしないでほしいな」

聞く耳持たずである。少し説教ぽいのがよくなかったかと反省していると、助け舟を出すかのように、ある生徒が放課後の教室に入ってきた。

「あ、ごめんなさい……。教科書を机に忘れてしまって、取りに来たんですが」

そう言って教室に入ってきたのは、スイスイであった。

スイスイはまさにガイマと真逆の性格をしていた。何でも自分のせいにしてしまう。そして他人を責めることがない。真逆の二人が同じ空間にいることが、ケイにとっては不思議に思えた。

「おい、聞いてくれよ、スイスイ。先生から自分勝手はやめろって注意されてるんだよ」

ガイマはスイスイに愚痴をこぼした。そうなんだとスイスイは笑顔を作ってガイマに対応していた。

「どう思う？先生の言うとおり、スイスイも僕のこと、自分勝手だと思う？」

スイスイはうーんと考えながらポツリポツリと話し始めた。

「私はガイマ君のこと、そんなに自分勝手だとは思わないけど・・・でも」

「でも？」

てっきり100%同意してくれると思っていたガイマは、逆接の言葉が出てきて、少し驚いて聞いた。

「これは自分に原因があるかもなって考えることは、少し辛いけど、大事なことだと思うな……。あんまり自分のせいにしすぎてしまうと疲れちゃうからやめた方がいいと思うんだけど、自分に責任があるって思うと、自分が主体になるっていうか……」

「しゅたい……。？スイスイの話は難しいなあ。もっとわかりやすく説明してくれよ」

閉口するへいこうガイマに、苦笑いをしながらスイスイは話を続けた。

「つまり……。そうだなあ、例えば、今日は外で遊ぼうって思っていたのに雨が降ってきたら、ガイマ君はどう思う？」

「そりゃあ、雨のせいにするさ。なんでこんな日に限って雨なんか降るんだって、むかつとしてそう言うだろうな」

ガイマはそんな時の場合を想像しながら、スイスイに答えた。

「やっぱりそうなるよね。雨が悪いんだってそう思うよね。でも結構私は、鈍感でおっとりしているからだと思うけど、雨は雨で悪くないなあって思うんだよね。雨だったらあんまり人が外に出ないから、ごみごみしていないし、雨が降るから飲み水が確保できるわけだし」

「スイスイは人がいいなあ。僕にはそんな受け取り方はできないよ」

ガイマはそう言うと天を仰いだ。

ケイは二人の話を聞きながら考えた。スイスイは何事も自分を主体に考えている。周りの状況に対し自分がどのように行動できるかと言うことで、ある意味自分を中心に回っている。ただそれが全面的に良いかというところではなく、自分中心にいるからこそ、すべての周りの出来事の原因を自分に持ってきてしまい、辛くなることもあると自覚しているようだ。

一方ガイマは物事が中心にあって、自分が蚊帳の外にいる。周りの状況に対して自分は何の影響も持たないと、匙を投げてしまっているようだ。これも一見悪いように見えるが、すべての責任を他者に任せることで、自分の責任は持たずに済む。2つの考え方は対照的だが、一長一短あるなどケイは思った。

## どちらが良いというわけではない

「僕は二人の考え、どちらも良いと思うな。ただこの世の中には中庸ちゅうようという言葉があつてね、先生はその言葉が好きなんだが」

「ちゅうよう？それどういう意味なの？」

興味を持ってガイマが質問してきた。

「要はAでもなくBでもなく、その中間あたりといった感じかな。スイスイみたいに自分のせいにして責任感持って動くこともいいと思うけど、やりすぎると自分が辛くなってしまうよね。」

逆にガイマのようにあんまり自分のせいにしなないと楽かもしれないけど、そうだと周りを自分の力によって変えていくのは難しいかもしれない」

少し厳しい言い方かなと思いつつ、ケイは話を続けた。

「だから、ガイマみたいな考え方と、スイスイみたいな考え方、これをミックスして中間あたりを取るっていうのはいいかもしれないね。自分のせいにしがちだなと思う人は時には自分を許し、周りに身を委ねてみるとか、一方いつも周りのせいにしてしまいがちな人は、自分に何ができるかを考えてみるとか。まあただ中庸の思考は個人の特性を無くすことにもなるから、これも一概にいいとは言えないんだけどね」

「ふーん、中庸ね。要は自分とは反対の意見も時には受け入れてみるっていうことね」

ガイマは予想以上に話を聞き入れて納得してくれたようだ。

「スイスイ、ありがとう。君のおかげで話が進んだよ」

ケイはスイスイにお礼を言った。

「いえ、そんな……。でもケイ先生の言うように、私もあんまり自分のせいばかりにしないで、もっと楽に生きようってそう思えました。ありがとうございます」

よかった、とケイは言って、その日三人は別れた。

どっちがいいとか悪いとか、100%白黒つけられることはこの世にはないんじゃないかと、ケイは常日頃考えていた。重要なのは、あまり極端になりすぎず、その両端を行ったり来たり、ゆらゆらゆらめくことが大事なんじゃないかと言う仮説が、ケイの中では出来上がりつつあった。

## 第4章 性格を直した、トゥアーリ

### 忘れん坊のトゥアーリ

トゥアーリは、いわゆるムードメーカーで、彼がクラスにいるだけで、場が和んだ。ケイが少しイライラしている時など、気の利いたジョークを言っただけで、場を沸かせ、そんなトゥアーリを見ていると、ケイも気持ちが落ち着き、実は助かっている部分も多くあった。

そんなムードメーカーのトゥアーリだったが、彼には弱点があった。それはちょっとだらしないところがあることだ。

まず忘れ物が非常に多い。宿題はほぼ間違いなく忘れるし、何日までに持ってきてと言われたものも、ほぼ確実に忘れる。

忘れないようにメモを取っておくよう、ケイから言われるのだが、メモを取ることを忘れてしまう。話は聞いているようだが、耳に入った瞬間、脳を通らず、そのままもう片方の耳から出てしまっているような印象だ。

とにかく覚えてそれを実行することが苦手であった。

そんなトゥアーリだったが、前述の持ち前の性格の明るさからそんなことは全然気にしていなかった。あることが起きるまでは。

## ハレは、マメな男子が好き

クラスにはハレという女の子がいた。彼女は少しトゲトゲしていてそっけない子であったが、そんなクールなところに好感を持つ男子も複数いた。

その一人がトゥアーリであった。何を隠そう、トゥアーリはハレに恋をしていたのだ。そんなトゥアーリに驚くべき話をもたらされた。クラスのミドから教えてもらったのだが、なんとハレの好きなタイプは、マメな男らしい。

それを聞いて楽観的なトゥアーリも肝を冷やした。確実に自分はマメなタイプではない。このままでは他のクラスの男子どもにハレを取られてしまう。

どうすべきか悩んでいたところ、親友のガイマに話してみることにした。

## やれるかどうかではなく、やる

「それはもう、お前が変わるしかないだろ」

そう言い放ったのはガイマである。このままだとダメな男子（例えばミドなど）に、ハレを取られてしまう。どうしたものかとトゥアーリがガイマに相談したところ、上記のような回答があった。

「やっぱりそうだよなあ。俺が変わらなきゃまずいよなあ。でもダメな男になんて、なれるかなあ」

トゥアーリは不安気である。いつもの楽観的な調子はどこに行ったのやら、今日のトゥアーリは自信がなさそうに、不安にしていた。

そんな不安そうなトゥアーリに、ガイマは言い放った。

「やれるかどうかじゃない、やるんだよ」

う……とトゥアーリは何も言葉が出てこなかった。

やれるかどうかじゃなく、やる。それはとても根性というか、気合いが必要そうなことに聞こえた。

ガイマは続けた。

「まあ、別に僕にとってはどうでもいいことだけど、僕は自分で言うのも何だけど、自己中だからね。そんな好きな女子を他の男子に取られるのを、黙って指をくわえて見ているなんてできないね。

トゥアーリは、ハレがマメな男が好きって情報を掴んだんでしょ。だったら、なんで動かないの。やればいいじゃない」

その言葉でトゥアーリは、心が決まった。やれるかどうかじゃなく、やるんだ。そう考えて腹が座ると、何でも自分ができるような気持ちになって、メラメラと心が燃えるのがわかった。自分ならできる、そう思えてきた。

そこからのトゥアーリは人が変わったようだった。忘れ物は一切しないようになった。宿題もやってくるようになった。

ハレがそんなトゥアーリを見てどうい感情を持ったかわからない。

トゥアーリがマメな男になるよう、頑張るようになってから数日後、ガイマは教師ケイと話していた。

「これでいいのかい、先生？」

「ああ、ありがとう。かなりトゥアーリも自分に自信を持って、やる気を持って励んでいるようだ」

実は、忘れ物が多いトゥアーリを見かねていたケイは、偶然、ハレがマメな男子が好きと言う情報をキャッチした。

それを同じくらいに知ったトゥアーリが、非常に焦っているという話を聞いた。

それを知ったケイは、ガイマに、少しトゥアーリを焚き付けるように仕向けたのだった。

「あんなに頑張っちゃって。無理しなきゃいいけどね」

ガイマは少し心配しているようだった。

確かにケイから見ても、トゥアーリは少し頑張りすぎているようだった。少しフォローを入れてあげた方がいいかもしれない。

しかしケイはこの体験を通じて、トゥアーリに、やればできる、逆に、やればできると思えばできる、ということを知ってもらいたかったのだ。

しかもそれを見ている他の生徒たちにも自分の気持ち次第でかなりのことが実現できるという自信をつけてもらいたかったのだ。

しかしガイマが言うよう、性格を変えるのは非常に大きなエネルギーを消費する。燃え尽きないようにそこはフォローを入れなければならない。

ただやはりケイの中では、自信を持ってやり遂げることを教えたくて、今回の一件に手を入れたつもりだった。これがどうなるかも含め、見守っていくつもりであった。

## 第5章 夢を持ってない、ハレ

### 心が枯れている、ハレ

ハレにとって、毎日はずまらなく、全てがグレーに見えた。

本当は昔は好きなことがあった。それは歌を歌うこと。よく両親に向かって歌を披露して褒められることが何よりも嬉しかった。そして将来は歌手になることが夢であった。

しかし段々と成長して、世間のことを知るとそんな夢は叶うはずがないと思うようになってしまった。

少し離れたコンコルドという大きな街では、自分よりももっと美しく、そして歌もダンスもできる女の子がたくさんいるらしい。

そんな中こんな田舎に暮らしている自分が、それに全てにおいて劣っている自分が、歌手になれるはずがない。厳しい現実を目の当たりにしてから、なんだか全てにおいてやる気がなくなってしまった。

昔は歌を歌うためには、宿題や家事をテキパキとこなし、自由になったら歌の練習をしていた。しかし今は全てにおいてやる気が出ず、まさに無気力状態であった。

歌を歌うこともしばらくしていない。なんだか歌うこと自体も怖くなってしまっていた。

歌手になることはできない、その現実を受け入れなければいけない気がしていて、ひどく怖くなった。

次第に、そんな歌手みたいな夢を抱くよりも、真面目でコツコツと働く人と結婚して、自分は家のことをした方が、よほど建設的な将来に思えてきた。そんなことをクラスメイトのミドについて先日話をしたところであった。

## 小川のそばで

歌手になるより、もっと堅実な道を歩んだ方がいい。そうは頭では理解したつもりなのに、なぜかハレの心は晴れなかった。

授業が終わって、家路につく際、学校の近くの小川に差し掛かり、そこに腰を下ろした。

この小川はハレにとってお気に入りのスポットであった。川がさらさらと流れているのを見ると、心が落ち着いた。心がざわついた時はここにきて、精神を浄化させるのであった。

そうしてしばらく川を見ていると、後ろに人の気配を感じた。

振り返ってみると、トゥアーリがそこにいた。心配そうな顔でこちらを見ている。

「おー、どうした、ハレ。元気なさそうじゃん」

ハレの顔を見ると、パツと表情を明るくさせ、様子を聞いてきた。

「別に、、あんまりよくはないわよ。ただボーとしているだけ」

そうかあと言って、トゥアーリはハレの横に座った。

「なんか考えていたんじゃないの？」

そう聞いてきたトゥアーリにハレは答えた。

「うーん、将来のこととかかなあ」

「将来のこと？」

「そう。あたしね、子どもの頃は歌手になることが夢だったの。歌を歌って両親が喜ぶのが好きだね。でも最近はその夢を諦めたの。だって、もっと歌が上手い人なんていくらでもいる。そんな中あたしがトップになれるのなんて無理だって」

それを聞いてトゥアーリは悲しい顔をして、言った。

「そんな簡単に諦めるなよ。お、俺もハレの歌、好きだぜ。音楽の授業でも一番上手いじゃんか。きつとなれるって」

トゥアーリの顔は心なしが赤くなっているようだ。しかしそれにハレは気付かず、答えた。

「どうだかねー。でもその夢を諦めてから、なんだか元気が出なくて、ため息ばかり出るのよ。ハア」

言った側からため息をハレはした。まさにとりつく島もないと言った感じであった。

それから無言の時間が流れた。こんな時、どんな言葉をかけてあげればいいんだろう。トゥアーリが必死で考えていると、教師のケイもやってきた。

## 何で選ばれるのか

「おお、ハレにトゥアーリ。デートかな」

ニヤニヤと笑って、ケイは近づいてきた。

「べっ、別にそんなんじゃないよ！」

顔を真っ赤にして、トゥアーリは否定した。ハレは死んだ魚のような目をして無反応であった。

「最近、ハレは元気ないね」

ケイもハレの様子には気がついていようだった。

「なんかハレ、歌手になる夢を諦めたんだってさ。それからなんかやっぱり元気が出ないみたい」

「どうして、歌手の夢を諦めたの？」

そのケイからの質問には、ハレ自身が答えた。

「だって、あたしより歌が上手い人、たくさんいるもの。その中であたしが選ばれて歌手になれるなんて、全然想像がつかない。きつと無理よ」

きつと無理よ、と言い終わった瞬間、さらに深い悲しみを、ハレは感じたようだった。

「まあ、確かに歌手になりたいっていう人はたくさんいるだろうからね。その中で一番になるのはかなり大変だろうね」

そんなことないよ、きつとなれるよ、と元気づけるかと思いきや、逆にケイはハレの意見に同調してしまったので、トゥアーリは驚いた。しかしその次の言葉の方が、トゥアーリを驚かすものだった。

「でも一番になる必要ってあるのかな？」

「え？」

その言葉にはハレも驚いたようだった。

「そもそもだけど、一番上手いって、歌が上手いってことを言っている？」  
「そうだけど」

「じゃあ、歌が上手いってどういうことなんだろう」

ハレは少し考えてからケイに答えた。

「そりゃあ、音程がピッタリと合っていて、声も大きくて表現が豊かでリズム感がいい。それに容姿もよくて、ダンスとかもできれば最強だと思うわね」

「うーん、なるほど。ちなみに、ハレにとって、好きな歌手の人はどんな人なんだろう」

そう聞かれて、パツとハレの頭の中には何人かの歌手の顔が浮かび上がってきた。

まず一人目は卓越した歌唱力を持っており、どんな状況においても歌を上手に歌い切ってしまう、歌唱力に定番のある歌手であった。

二人目は同じく歌唱力はあるのだが、ファンとの絆を大事にする人で、そういった優しい性格が好きであった。

三人目は歌唱力がありつつも、独自の表現方法を模索し、周りに迎合せず、自分のスタイルを突き通している人であった。

それを考えていると、この三人にはある共通点があることがわかった。

「先生、あたし、すごく重要なことに気づいたかも」

ニヤリとして、ケイは質問した。

「それはなんだい」

「あたしが好きな歌手の人たちは、みんな好きなポイントは違うんだけど、歌が上手いっていう点  
はみんな同じなの。」

でもあたしが好きなポイントはそこじゃない。それはある意味最低限クリアするポイントであっ  
て、好きな歌手の人たちにはそれぞれ好きなポイントが違う。

オールマイティにいるんな歌を歌えるところだったり、

ファンを大切にするとところだったり、

自分のスタイルを追求することだったり、

みんな違うのよ」

そう言ったハレに、トゥアアリは困惑しながら呟いた。

「それってつまり、、、どう言うこと?」

ケイはニコリと笑いながら話した。

「ふふふ、ことわざで、人は長所によって好かれ、短所によって愛される。ともいうね。別に歌手になりたいのだったら、歌が一番上手い必要はないかもしれない」

こくりとうなづいて、ハレは答えた。

「ありがと、先生。あたし、やっぱり歌手になる夢は諦められない。だって、歌を歌うの、好きだもの。歌の練習はきちんとして、それに加えてあたしらしさみたいなものがプラスできないか、考えてみるわ」

ニコリとハレは笑った。久しぶりの笑顔であった。

一本槍いっぽんやりで行こうとすると、相当その長所が突出していないと、難しい。何との掛け合わせで行くか、それは続けてみないと、わからないのかもしれない。

## 第6章 満点以外受け入れられない、キベル

### ガリ勉、キベル

キベルはただひたすらに勉強をする子どもであった。ダンケ学校以外にも家庭教師をつけて、難易度の高い問題を解き続けていた。

朝起きて自学自習。そして学校に行つて、家に帰つてきて家庭教師と勉強。家庭教師が帰ると夕ご飯を食べて、また勉強してから寝るという生活を送っていた。

なぜこんなに勉強をするかという点、ダンケ学校を卒業したら、都会のコンコルド街にある、有名な進学校に入学するためであった。

ではなぜその進学校に進むかという点、さらにもっとお兄さん向けの進学校に進むためであった。そしてなぜその進学校に進むかという点、大きな会社に入って、将来安泰になるためであった。

そう信じてキベルはひたすら勉強した。好きなこともかなり抑制し、勉強に打ち込んだ。

ダンケ学校でのクラスのみんなが実はうらやましかったが、そんなことはおくびにも出さなかった。いつしかキベルはクラスのみんなを軽蔑するようになって行ってしまった。

こんなに遊んでいて、将来どうするつもりなのだろう。気楽な連中だ。こんな簡単な問題も解けないで、呑気にしている連中と昼間一緒だなんて、気が狂いそうだ。早く帰って勉強しなければ。僕はエリートなんだ。こんな連中とは違うと。

唯一、体力をつけるために、学校の近くの小川でやっていた水泳教室も、勉強に専念するため、辞める時期が近づいてきていた。

今日はその水泳教室の最後のレッスン日であった。

## リーフ先生と、小川のそばで

「今日で最後なのね、キベル君」

そうキベルに声をかけたのは、ずっと水泳を教えてくれたリーフ先生であった。一通り水泳の練習が終わって、小川のそばで二人は休んでいた。

「リーフ先生、ありがとうございます。いろんな泳ぎ方で泳げるようになって、そんなに速くは泳げなかったけど、自分の財産になったと思います」

「財産だなんて、仰々しいわね。まあ、よかったと思ってきているのなら、よかったわ」

そう言って、リーフ先生は笑って、小川につけた足をパシャパシャと動かした。

「それでキベル君は、これから勉強漬けてわけ？」

質問してきたリーフ先生に、キベルは答えた。

「そうですね、、、計算の問題は得意なんですけど、文章を読解するのがあまり上手なくて。これからはもっと読書量を増やして国語の力を伸ばそうかと。それにはもっと時間が必要なんです」

キベルについてくれている家庭教師が言うには、キベルは国語の能力が特に悪いらしい。これではコンコルド街にある進学校にはまだまだ入れないレベルらしい。

勉強したとしても、進学校に入らなければ意味がないのだ。そのためにはもっとテストの点数を上げなければいけない。満点以外あり得ないのだ。90点ではだめ、80点なんて論外だ。100では

ないといけない。100点以外受け入れられないし、99点でもだめ。100点を取らないといけないのだ。

「なんか、大変ねえ。私が子どもの頃なんて、本は楽しいものだったけどなあ。」

「僕は先生とは違います。僕はコンコルドにある進学校に入学しなければなりません。もっとテストでいい点を取らなければなりません」

ちよつと棘<sup>とげ</sup>がありつつも、キベルはそうリーフ先生に伝えた。

「そうよね、、、キベル君の人生だもんね。キベル君、もし良かったら、また水泳教室に戻ってきてくれてもいいからね。」

そんなことは絶対ないな、と思いつつも、キベルは言った。

「はい、ありがとうございます。もし機会があったら、またきます」

## デジタルな勝負

家に帰ると、すでに家庭教師のヤヅ先生が来ていた。

「すみません、ヤヅ先生、お待たせして」

少しムツとしながらも、ヤヅ先生は無言でうなづいた。

そしていつもの二人の勉強タイムが始まった。

ヤヅ先生は普段は静かだが、キベルが勉強ができないと次第に不機嫌になっていき、怒鳴ってくることもしばしばあった。

今日も例の国語の問題ができず、苦戦していると、案の定ヤヅ先生は唾を飛ばしながら怒鳴ってきた。

「キベル君、こんな問題が解けないで、コンコルドの学校に行けると思っているんですか？これは過去に何度も解いたでしょう。なぜわからないかな。」  
すみません、と謝るキベルにヤヅ先生は重ねて言った。

「100点以外はあり得ません。99点取っても、100点の子がいれば、あなたは落ちて、その子が受かります。そういう厳しい世界なんです。1点でも高く積み上げてください。それが合格の近道です」

わかりました、とキベルは言った。その日の晩御飯はあまり喉を通らなかった。

それから一ヶ月くらいが経った。勉強漬けになったキベルは次第に顔色が悪くなり、体重も減って行ってしまった。

そんな様子を見かねたキベルの親は、ダンケ学校での担任の教師のケイに相談を持ちかけた。ケイはキベルと少し話をしてみることにした。

## やらなきゃいけないと、やりたいこと

ケイとキベルがきたのは、キベルが少し前まで水泳教室に通っていた小川であった。

今日はレッスン日ではないので、リーフ先生もいなく、誰もいなかった。

「どうだい、勉強は楽しいかい」

そんなことあるはずないだろ、何を聞いてくるんだ。素<sup>す</sup>っ頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な質問に驚きつつも、キベルは答え  
た。

「先生、勉強が楽しいはずないじゃないですか。拷問ですよ、拷問。でも、僕はやらなくてはいけないんです」

「それはなんのためなんだい？」

「ケイ先生には言いませんでしたっけ？僕はダンケ学校を卒業したら、コンコルドの進学校に進みたいと思っていますんです。だから勉強をして頭を賢くしなければならぬんです」

「それはいい学校に入って、いい会社に入って、安泰な生活を送るためかい？」

ぎょつとして、キベルはケイを凝視した。まさに次自分が言おうとしたことを先にケイに言われてしまった。

「そうです、僕は未来のために今、頑張っているんです。クラスのみんなとは違う。」

そう言うと、キベルは少し黙った。二人の間に静寂が流れる。

小川を見ていると、水泳教室での日々がキベルの頭に蘇ってきた。

最初は全然泳げなかったが、息継ぎなしで随分な距離を泳げるようになったり、苦手な背泳ぎでもまた結構な距離を泳げるようになったり。自分は出来ない生徒だったと思うが、「できる」喜びを感じる事ができていたと思う。

「実はね、今日はスペシャルゲストに来てもらっているんだ」

そう、ケイがいうと、なんと後ろから、リーフ先生が笑顔でやってきた。びっくりしてキベルは言った。

「なんでリーフ先生がここに？」

ニコニコしながらリーフ先生が言った。

「実は先日、こちらのケイ先生からお話しがあってね。ちょっとキベル君が元気がなさそうだから励ましてほしいと相談を受けたのよ」

「元気がないだなんて、僕は平気ですよ」

「でもだいぶ痩せたみたい。ご飯は食べているの？」

「大丈夫ですって、子どもじゃないんだから」

「あなたはまだ子どもよ」

子どもじゃないですって、とそんな問答が続いた。

「僕はね、キベル」

ケイがキベルに話しかけた。

「勉強をするなどは言わないし、君が信じた道を進めばいいと思う。ただ客観的に見て、君の体はどうやら拒否反応きよひはんのうを示しているらしい。テストでいい点数を取らなければならぬという呪縛じゆばくによつて、君の体は拒否反応を示しているんだ。」

「だったらなんですか。どうすればいいと言うんですか。

勉強をしないといい学校に入れないのは真実でしょうか？

いい学校に入れないと、いい会社に入れないのも、真実でしょうか？

いい会社に入れないと、食いつぱぐれるのも真実でしょうか？

だったら、今、歯を食いしばって、勉強するしかないじゃないですか」

自分の言っていることに、微塵の疑いはなかった。しかしその中に虚しさが潜んでいることに、キベルは気づいていた。

「そう、その通り。僕も子どもの頃はそう信じていた」

「えっ」

ケイの告白に、キベルは驚いた。

「僕も子どもの頃、今のキベルみたいに勉強していい学校に入って、いい会社に入れば将来安泰だと思うって、同じことをしていたんだ」

「そうなんですか・・・」

実はケイも、今のキベルのような気持ちで少年時代を送っていたことに、キベルは驚いた。

「でもね、キベル。実は少し結果が違ったんだ。これは先にその道を歩いた僕からのアドバイスだ。実は、いい学校、いい会社に入っても、将来安泰ではない。というよりも、僕は教師をする前、いい会社に入ったんだが、みんなが優秀すぎてついていけなくてね。いい会社に入ったら、次はいい社員になるのが次のステップなんだが、僕はそこで落第したのさ。だから伝えたい一つ目のポイント

は、いい学校、いい会社に入っても、次はいい社員になるっていうステップがあつて、この競争はいつまでも続くということなんだ」

キベルはその話を聞いて、うんざりした。まだこのレースは続くのか。

「一つ目ってことは、あと何個かポイントがあるんですか」

リーフ先生もケイの話が気になるようで、質問してきた。にっこりと笑って、ケイは答えた。

「ええ。と言っても、あと一つですがね。二つ目のポイント、最後のポイントともなるんだが、それは、やらなければいけない。では続かない、ということなんだ」

「やらなければいけないだと、続かない・・・」

キベルはケイの言ったことを反芻した。

「そう、逆に言うと、やりたいことでないと続かないとも言える。

僕は優秀な社員になれなくて一度挫折した。一応そこから社員として働いていたんだが、流石に何年もやっている、幾らかは仕事ができるようになってくる。

そうなる、途端に生活に張り合いがなくなってしまうんだ。上を目指そうという気持ちもない。一応仕事はできる。ただこれをあと何十年もやるのか。そう思うと、途端にやる気がなくなってしまうんだよ」

「そんな、じゃあどうすればいいんですか」

半ば泣きそうになっているキベルに、ケイは言った。

「僕はその時自分の好きなことを見つけたんだ。僕はアクセサリーを作ることが好きなんだけど、それを社員生活の時に見つけたんだ。

好きなことはいい。生活に張り合いが出るんだ。好きなことがあるから、生きていこうという気持ち湧いてくる」

「私も今、水泳の教師としてやっているけど・・・」

リーフ先生も、キベルに話しかけた。

「やっぱり子どもの頃から泳ぐことが好きで、それを仕事にしたって感じなの。」

やっぱり好きなことだと、どんなに嫌なことでもこれをしたからって言うので、結構突破できちゃったりするのよね」

うんうんとうなづきながら、ケイも言った。

「リーフ先生はすばらしいですよ。ご自分の好きなことを職業にされていて、それで生活をされている。僕も、好きなことを自分の中心に置くことは非常に大事だと思うんです」

キベルは、ケイとリーフ先生の話を聞きながら、自分の頭で考えていた。

結局僕は将来のためと言って、勉強をすることを選んだ。でもそれもずっとレースのようなものは続いていき、どうやらケイのように途中で息切れする大人もいるらしい。

であれば、リーフ先生のように、自分の好きなことを中心として、仕事を選んだ方が、長続きできそうだ。

「ってことは、なんかしなきゃいけないっていうより、何がしたいかっていうことなんですかね」  
そう言ったキベルに、大人二人は笑顔で言った。

「そう。その通りだよ、キベル。」

「うん、私もそれがいいと思う。勉強も大事だとは思うけど、それだけじゃないと思う。キベル君が少しでも楽しいと思えるものをやった方がいいと思う。だって、キベル君の人生だもの」

そう言われて、キベルは少し恥ずかしそうにして、言った。

「リーフ先生、水泳教室、戻ってもいいですか？僕が今好きなことは何って聞かれたら、やっぱり水泳がいま頭の中に浮かんできて・・・」

そう言ったキベルに対し、リーフ先生は満面の笑みで、キベルの手を取って言った。

「もちろん！！」

すでに道が出来上がっているところを登っていくのもいいだろう。しかし見えている反面、多くの人がある道を登っていく。

道の幅は決まっている。その道に多くの人が集まればどうなるかはおおよそ察しがつくだろう。その道に行くのか、道はあまり出来上がってないかもしれないが、一步一步自分の意思でその霧の中を歩いていくのがいいのか、それは誰にもわからないが、自分の意思で踏み出す一歩は、生き生きとしているだろう。

## 第7章 人の顔色が気になる、ミド

### 気が利く子、ミド

ミドは昔から、賢い子だね、気が利く子だね、と言われて育った。

事実、ミドは同年代の子から比べても、非常に利口な子であった。「を聞いて」Oを知るとはまさにこのことで、大人がやろうとする半歩手前のことを予測し、それをアシストするような言動を取っていた。

それはダンケ学校に入ってからも続いた。教師のケイからも「ミドはよく気が利いて助かるよ」と何度言われたことか。

なんとなくミドにとって、大人たちの考えることが予測できてしまうのだ。感受性が高いというか、何も考えずに体が勝手に動いてしまうのだ。もうそれは、性質と言ってよいものであった。

### 欠点が気になる

ずっと「できる子だね」と言われて育つと、その子はできなかつた時を非常に恐れるようになりがちだ。ミドも御多分に漏れず、他人の顔色を伺ううちに、自分の思った通りにいかない大人の反応を怖がるようになってしまった。

でも、それを外見からはわからぬよう、必死で隠し、平静を装った。本当は怖くて、誰かに助けてもらいたいのに。

いつしかミドは完璧を求めるようになっていった。

そう考えると、ミドはキベルに非常に自分と共通項が多いと感じ始め、親しみを感じ始めていた。キベルも勉強が熱心で、いい学校に入り、いい会社に入ると、熱を入れて勉強をしていた。

キベルも失敗してはいけな。いい学校に入るしかない、入らないという道はないと、崖っぷちな気持ちで勉強をしているように感じた。

ミドはそこまで勉強は熱心ではなかったが、失敗してはいけなという気持ちにがんじがらめになっていく様子は、はたから見ていると、自分によく似ていると感じていた。いつから、こんなふうになってしまったんだろう。

ミドはダンケ学校からとぼとぼと帰っていた。

ふと空を見上げると、鳥がチュンチュンと鳴いている声が聞こえた。自分も鳥になりたい、そう感じた。

自分も鳥のように自由に何にも縛られることなく、大空を飛んでいきたい。このジメジメとした地面の上ではなく、爽やかな大空を飛んでいきたい。しかし、ミドの気持ちは晴れることはなかった。

## キベルからの言葉

気が利いて利口なミドであったが、彼には弱点があった。

それは学校の体育が苦手だということだ。

特に走るのが遅いのが、とても嫌であった。クラスに二〇人いて、ドベか、ドベから二番目だ。しかも女子も入れてその順位だったので、体育の時間が本当に嫌だった。

そしていつもドベを争っているのが、キベルであった。キベルも運動神経が悪く、走るのが非常に遅かった。

そして今日は嫌いな体育の時間。それも「時間目からある。前日の昼過ぎくらいから、「明日は雨になれ、雨になれ・・・」と祈っていたが、その願いも虚しく、かんかん照りの、体育日和になってしまった。

その日、体育着に着替え、校庭に出ると、今日は50m走をやるらしい。最悪だ、ミドの最も不得意な競技であった。

そして2人がペアになって走るらしい。早速1組目のペアが走り出している。

最初のペアは、クラスのムードメーカー、トゥアーリと、清掃委員のシバ。この2人は目にも止まらぬ速さで50m走を駆け抜けた。

2組、3組目と走り、そろそろ自分の番だ。今回はキベルと走るらしい。

キベルとなら足の速さはどっこいどっこいだから、遅くてもバレにくい。少し安心して自分の走順を待った。

待っているとき、キベルがミドに話しかけてきた。

「ミド、実は僕、もう勉強するの、やめたんだ」

「えっ」

あんなに勉強第一にしていたキベルが、その勉強をやめるなんて、予想もしていなかったことだから、ミドは驚いて、ろくに返事もできなかった。

「色々考えたんだけどさ、これから長い人生、好きでもない勉強をやるより、好きなことを少しでもした方がいいかなってさ。逃げだって言われれば逃げかもしれない。でもガリ勉はもう疲れちゃってさ。好きな水泳を続けることにしたんだ」

「・・・」

ミドは何にも言えなかった。ただミドの心には、好きなものがあって、いいなとそれだけは感じることができた。

4組目、スイスイとハレが走る。ハレの方が少し早くゴールに着いたようだ。キベルは話を続けた。

「なんか僕、思ったんだけどさ、今までなんか失敗することが怖かったんだよね。失敗したらすごく塾の先生からは怒られたし、親にもがっかりさせるかなって。そうしていたら、段々完璧じゃないと、自分はいちやいけないうって思ってたんだ」

ミドはドキツとした。冷や汗を感じているのがわかる。これは走るのが遅くてみんなからバカにされるのを恐れているのではない。完璧じゃないと、自分じゃないと言ったキベルの言葉に心当たりがあったからだ。

「おい、次、最後だ。キベル、ミド。いちについて〜」

教師のケイの言葉が聞こえる。ぼうつとしながら、ミドはコースの位置に着いた。走る前、キベルはこう言った。

「水泳を続けていると、楽しいんだ。練習すればするほど、昨日の自分より上手くなっている。そりゃあ周りにはもっと速くて綺麗に泳げる人はたくさんいるよ。でもいいんだ。僕は僕だから。好きなものがあったって、それで前より成長している。勉強していた時はこんな気持ちならなかったのにな」

ミドは、少し視界がクラクラし始めていた。なんだか自分が信じていたものが崩れ落ちそうであった。

ケイが50m先からこう言い放った。

「位置について・・・よいい、どん!!」

二人は走り出した。

どちらが勝ったか、ミドはよく覚えていなかった。

## 昨日の自分より、成長した自分

その日の帰り道、ミドはふと気づくと、また鳥の音がしているのに気づいた。

チユンチユンと、前の鳴き声と少し違うかもしれない。でも本当に違っているか、あまり自信がなかった。

「やあ、ミド。お帰りかい？」

振り返ると、教師のケイがいた。

「先生、今日は帰るのが早いんですね」

「ああ、今日は子どもの誕生日でね、帰ってパーティなんだ。仕事は明日に全部任せて、今日は帰るよ」

はっはっはと、ケイは笑った。

「それはそうと、今日はミドは少しうわの空って感じだったね。体育の時間の後くらいからかな。何かあったのかい？」

ケイは優しくミドに話しかけた。

「うん、先生。今日、ちょうど体育の時間に、キベルから、話をしてくれたんだけど、キベルは勉強をするのをやめて、好きな水泳を続けることにしたんだって」

「うん、そうだね、最近の話だね」

「そうか、最近の話なんだね。それでそこでキベルが言っていた言葉が頭に残って。なんか勉強がでない自分は自分じゃないように感じるとか、自分が好きな水泳をしている時は、昨日の自分より成長している気がして楽しんだってさ」

そうか、とケイは言って、ミドと一緒に並んで歩いた。

「それを聞いて、ミドはどう思ったの？」

しばらく黙ってから、ミドは答えた。

「羨ましいなって、純粹に思った。なんか最近大人の要望とか、求めているものがなんとなくわかって・・・、これは昔からなんだけど。だから純粹に自分が好きなものをやれているキベルが羨ましくなったんだ」

ケイも少し考えてからこう言った。

「ミドは本当に鋭いからね。大人より察しがいいというか。それで困ることもあるんだろうね。少し気を使い過ぎてしまうというか。気が使いすぎると、満点主義になりやすいからね」

「満点主義？」

「そう、つまり相手の顔色を伺い過ぎて、その機嫌を損なわないように気を使い過ぎてしまうわけだ。相手の機嫌がいいを満点にして、その満点をキープしようとするわけさ」

満点をキープというのは大変だなとミドは感じた。さすがのミドも学校でのテストを全て満点を取れているわけではない。それを全部のテストで満点を取らなければいけないとなったら、非常に大変なことになる。

ケイは話を続けた。

「キベルの言っている、好きなことだと、昨日の自分より成長しているのが楽しい、というのはおもしろい感想だね。自分の好きなことだと、あまり周りの目が気にならなくなるのかもしれない」

それを聞いてミドも賛成した。

「うん、僕も、キベルみたいに、自分の好きなことを見つけて、昨日の自分より成長していることを、楽しみたいな。」

「そうだね、さっきのが満点主義だとしたら、これは加点主義だ。昨日の自分より一点でも二点でも点数が取れていれば、楽しいのだから」

満点主義より加点主義。いい言葉だな、とミドは感じた。

自分にもきつと好きなことは見つかる。それだけはなぜか自信がある、ミドであった。

## 第8章 「コミュニケーションをあきらめた、ロゼッタ

### 心を閉ざす

ロゼッタは口数の少ない女の子であった。

あまり自分から人に話しかけることはない。聞かれたら答えるというスタンスだ。

よく周りからは、ロゼッタは何を考えているかわからないと言われた。それもそれのはず、自分から声もかけないし、あまり自分の意見を言うことがないのだ。

それをロゼッタ自身はちゃんと自己分析していた。おそらく自分は、人から拒絶されるのが怖いのだ。

「え、そんなこと思っているの？」

「そんなの変だよ」

「私はそんな考え方嫌い」

このように自分の意見をそのまま出したら、人から拒絶の反応が来るのでは、そう思うと怖くて自分の意見が言えないのだった。

なぜこうなったのかはわからない。生まれつきなのか、小さい頃に拒絶されてショックを受けた過去があるのか。

思い当たることがないこともないのだが、これといった大きな原因は見当たらなかった。ただロゼッタの中では、相手からの拒絶が怖いのだろうということは、これまでの人生の中でわかっていた。

それにロゼッタは自分と気が合う人というのがほとんど現れなかった。

ダンケ学校でも、ほとんどの人と気が合わない。というか、何がそんなに楽しく、何がそんなに不快なのか、全く共感ができなかった。ロゼッタから見れば、ひどく低次元の空間で、喜び、そして悲しがつているように見えて、自分が住む世界とは異世界に住んでいるような気がしていたのだ。それも重なって、さらに人に心を開くことは少なくなってしまった。

ロゼッタは人と関わることをあきらめてしまっていた。

## 閉ざしても、開けてもいい

生徒とは全く馬が合わなかった口ゼツタであったが、教師のケイには惹かれていた。

いつも忙しそうにはしているが、生徒一人一人のことをしっかりと見ていて、そこに愛情も感じていた。ダンケ学校に通ううちに、自然とケイには心が開けるようになっていた。

給食が終わり昼休みの間、教室の中であたたかいひだまりに包まれる中、ケイと口ゼツタは話をしていた。

「先生、私なんだか友達がいなんだよね。なんだか心がちゃんと開ける友達が少ないというか」

「ふーん、それはなんでなんだい」

友達のような感覚で、二人は話を続けた。

「わからない。でもなんとなく心の波長が合わないというか、なんとなく仲良くなれないんだよね。別にみんなが悪いとか、私が悪いとかじゃなくて、相性の問題？」

ふーん、なるほど、と一呼吸置いてから、ケイは話した。

「人それぞれ十人十色、合う合わないは必ずあるからね。別に無理して付き合う必要はないんじゃないかな」

それに対し、ロゼッタはこう反論した。

「別に少しの付き合いで済む仲だったらいいけど、学校だったら毎日会うじゃない？その人たち全員がなんか気が合わなくて気まずい感じだと、毎日の学校も嫌になっちゃうよ」

困った顔で懇願するロゼッタに対し、ケイは笑顔で答えた。

「まあ学校だと毎日顔を合わせるからね。その人たちとなんか気が合わないのは確かにつらいことだね。でも・・・」

そう一度区切ってから、ケイは話した。

「まず一つ言えることは、無理して仲良くする必要はないってことかな。それはロゼッタ自身がつらくなってしまうだろうし、無理に心を開く必要もないと思うよ。」

ロゼッタの中で、ちよつとさみしいけど、この人たちに心を開くと攻撃されると思っているんだろう。それなのに無理やり心をこじ開けてもいいことはない。だから無理して心を開くことはない、というのが一つ目。」

「一つ目ってことは二つ目があるの？」

聞くロゼッタに対し、ケイはこう答えた。

「うん、もう一つあるよ。それは、意外に心を少し開くと、相手は受け入れてくれる時が多いってことさ。多分ロゼッタは過去のどこかか、それとも生まれつき、警戒心が強い性格なんじゃないのかな。だからむやみやたらに自分が思っていることをあまりオープンにしないことにしている。」

でも人間、自分の気持ちをオープンにしても、あまり相手は気にしないことが多いってことさ。取り越し苦労じゃないけど、自分の気持ちを包み隠さず言ったとしても、相手は傷つかないし、攻撃もしてこないことが多いってことさ」

そう言われても、ロゼッタの顔はあまり晴れてはいなかった。

「つまり、心を開かなくても、開いてもいいってこと？」

「うん、そういうこと。どっちの道を取ってもいいってことさ。まあ性格は直せるかもしれないけど、相当苦労するからね。無理はしなくていいと思うけど、案外相手は攻撃してこないよ、ということとを頭の片隅に置いておいてもいいかな」

そういうもんかなと思った時、昼休み終了のチャイムが鳴った。

## イライラする人には、心を開けづらい

その日の授業の中で、図工の時間があつた。

これは2人でペアになって、お互いの似顔絵を描くというものだった。

ロゼッタはスイスイとペアになった。スイスイも大人しい子で、あまり自分の意見をズケズケと言うタイプではなく、人の意見をウンウンとうなづくタイプであつた。

まず、ロゼッタがスイスイの似顔絵を描いた。ロゼッタは絵が比較的得意であつたのに、数分で描き終えてしまった。

そして次はスイスイがロゼッタの似顔絵を描く順番だ。

最初は順調に描いているようだったが、途中で筆がぴたりと止まってしまった。

そして何かちらちらとロゼッタの方を見て、何か言いたげだが、モゴモゴして何も話してこない。しびれを切らしたロゼッタが、スイスイに話しかけた。

「どうしたの？何か言いたいことがあるの？」

それに対し、さらにモゴモゴと言っているのだが、何を言っているのかうまく聞き取れない。若干イライラして、ロゼッタはスイスイに聞いた。

「なに？ちゃんと話してよ」

「まあまあ、そんなロゼッタもカリカリしないで」

そう言って二人の間に入ってきたのが、ミドであった。

ミドは非常に優しい声で、しかも笑顔でスイスイに話しかけた。

「どうしたの、スイスイ。何か、ロゼッタにして欲しいことがあるのかな」

そうすると、少し安心した顔になり、スイスイはロゼッタとミドに話した。

「あの・・・」

次にどんな言葉が出るのか、ちよつと身構えた二人の前に出された言葉は、拍子ひょうしめ抜けぬするものだった。

「あの……、ちよつとあごを引いて欲しいだけど」

「へ……、あご？」

「うん……ロゼッタちゃん、ちよつとあごが出ているから、引いてもらったほうが可愛く描けそうだから……」

キョトンとするロゼッタ。ミドは笑顔で言った。

「確かに、あごは引いた方が、シュツとしていい絵が描けそうだね。

ロゼッタもあんまりカリカリしないだね」

そう言って、ミドは自分のペアの人の似顔絵を描くのに戻った。

ロゼッタは困惑していた。どうしてそんな簡単なことなのに、スイスイは自分に言ってくれなかつたんだろう。

でも心当たりがいくつもあった。

まず、相手がイライラしていたりすると、優しい人や空気を読める人は、コミュニケーションを取るのを躊躇する。それはあたかも溢れそうなコップに、さらに水を注ぐようなものだ。そして水がこぼれたら、「なんで水を注ぐの！」と自分に矛先が向けられる。

だからイライラしていたり、怒っている人には自分の心を開いて自分の意見を言いづらくなってしまうのだらうと、ロゼッタは考えた。

## 言葉にしないと伝わらない

そして気づいたことの2つ目は、言葉にしないと、相手に伝わらないということだ。

モゴモゴするスイスイを見ても、何をして欲しいかロゼッタはわからなかった。

自分の気持ちや思いを伝えるために、言葉があるのだ。そして言葉というものは、口にしないと伝わらない。いや、口にしても伝わらないこともあるのだが、まずは口に出さないと決して伝わらない。

そういう口ゼツタも、こういう状況でこういう顔をしているのだから、こういうことを言いたいて「察さつしてよ」と思う時がしばしばあった。

その場の雰囲気や流れから、こうすることが当然でしょと、暗黙あんもくの了解りようかいを他者に求めていたのだ。

しかしそれは家族、ましてや友達になれば、考えることも違う。暗黙の了解は非常に長い時間を共にした者同士だけに生まれる裏技うらぎのようなもので、そんな裏技を日常的に使うのは間違いのような気がした。

やはりベースとなるのは、口に出して話すこと。それが基本原理のような気がした。とはいえ、その基本原理をできないくらい、イライラした雰囲気を出してしまった自分に、口ゼツタは反省した。

そして笑顔を作り、スイスイにこう口に出して伝えた。

「スイスイ、なんかイライラした感じになっちゃって、気を遣わせちゃってごめん。ほら、あごを引いたんだから、きれいに描いてよね」

そうすると、スイスイの方も笑顔になって、

「うん、ロゼッタちゃん、可愛いんだから、ちゃんと描くね。まかせて！」

そう言って、二人はお互いいい気持ちになって、その日の図工の授業を終えたのであった。

## 第9章 負けるのが嫌いなパディン

### 負けず嫌いなパディン

パディンは、とにかく負けるのが嫌いだった。

クラスの中で誰よりもスポーツができないと悔しがったし、勉強も一番でないと気に入らなかつた。どうやらパディンの言動を見ていると、勝つというより、負けるのを徹底的に拒否しているような感じがしていた。

最近だと、給食を食べるのが一番早くないと気が済まなくて、大急ぎで給食を食べた結果、気持ち悪くなり、ダンケ学校の医務室で休まなければならなくなったほどだ。

気になった教師ケイは、パディンと放課後に少し話してみることにした。

### 負けるのが怖い

「パディン、君は学校に入ってからずっとそうだけど、どうしてそんなに負けることを嫌うんだい？」

ケイは単刀直入に、パディンに聞いてみた。パディンの答えはこうであった。

「だって、勝負事には勝たないと。そういうふうに言われて、おれは育ったよ。負けるのはだめ。勝たないと自分には価値がないと思っている」

「それはちよつと言い過ぎじゃないかな。別に失敗したっていいじゃないか。というより毎回勝てる人なんて稀だよ」

「そうは言っても、負けるのは嫌なものは嫌なんだ」

こういった形で話は埒が明かず、その日の話し合いは終わった。

## 天才クラウス

ケイとの話し合いが終わって、家に帰ろうとしていた時のことだ。パディンは、同級生のクラウスと出会った。

クラウドはいつも冷静で、とても同じ年には見えなかった。大人のような雰囲気を持った、クールな男であった。

いつもパディンは一番になるうと思うのだが、どうしてもクラウドには敵わなかった。

勉強でもスポーツでもクラウドが一番成績が良かった。それも何か努力をしているような感じではなく、いつも余裕を持っている。そんな涼しげな顔のクラウドが、パディンにとっては気に食わなかった。

「やあ、パディン。お帰りかい」

「ああ・・・」

家の帰る方面が同じなので、自然と並んで歩く形になった。パディンは思い切って聞いてみた。

「なあ、クラウド。なんでお前はそんなに余裕があるし、頭もいいんだ。それにスポーツもできる。欠点がねえじゃなねえか」

不躰<sup>ぶしつけ</sup>なパディンの言葉にも、クラウドは全く意に介さず、少し笑みを浮かべたまま、答えた。

「別にそんな大したことないよ。というか僕は君に興味があるんだ」

思ってもみなかった言葉に、パディンは動揺した。

「な、なんだよ、興味があるって。おれは悪いけど、男には興味はねえぞ」

「ははは、そういうった意味ではないよ。君のその負けず嫌いな性格さ」

「おれの性格？」

「そう、僕から見て、君はとても負けず嫌いに見える。ちょっと異常なほどにね。それはなぜそういう性格なのか。元々なのか、それともいつかからなのか」

そう言われて、自分がなぜこんなに負けるのが嫌いになったか考えてみた。

そしてある出来事を思い出したのだった。

## リレーのアンカーとしての責任

パデインは走るのがとにかく速かった。まだダンケ学校に入る前の話だ。ダンケ学校の前に、エコノー幼稚園というところにパデインは通っていた。

そしてエコノー幼稚園で、運動会があった。足が速かったパデインはリレーのアンカーになった。パデインの元にバトンが回ってきたとき、相手チームよりだいぶリードがあった。パデインはバトンを受け取ると、すごい勢いで走った。しかしコーナーを回ろうとした時足がもつれて転んでしまった。すごい勢いで走っていたので、転んだ時の衝撃もひどく、すぐには立ち上がれなかった。そうしている間に相手チームに抜かされてしまい、かなりのリードがあったにも関わらず、パデインのチームは負けてしまった。

その時のことが、クラウドの言葉によって、フラッシュバックのように蘇ってきた。

自分のリレーのアンカーとしての役割を果たせなかった不甲斐なさ、そして責任を果たせなかった自分に対しての怒り、恥ずかしさ、いろいろな感情が湧き出たのを、子どもながらに覚えていた。だが、そのことはパデインはクラウドに話さず、黙っていた。

クラウドは口を開いた。

「責任と役割」

ドキツとして、パディンはクラウスの方を見た。クラウスは歩きながら、目線はまっすぐを見たままであった。

「人はその役割を果たせない時、果たせなかった自分を責める。パディン君にもそんな過去があったのかな。そしてまたそうならないよう、役割を果たせない、つまり負けることをひどく避けるようになったのかな」

イラついた口調で、パディンは反論した。

「なんだよ、役割とか。それがおれの性格と、どう関係してくるんだよ」

また笑みを浮かべて、クラウスは言った。

「ごめんごめん、なんか責めるような口調になっちゃったね。人は負けるのを恐れる時、過去の失敗した記憶から、もうそれを経験しないために、回避する行動を取ると思うんだ。もしかしたら、それがパディン君の性格を形成する一要素になったのかなって思ってたね」

頭が混乱して、パディンは言った。

「なんだよ、ケイセイとかヨウソとかって。お前の話は難しく、よくわからん」

「そうだよね、ごめんごめん。でもあんまり思い詰めない方がいいよ。別に負けたって大したことはないよ。そもそも負けるってどういう意味なんだろうね。そこから考えた方がいいのかもしれないね」

それじゃ、と言って、分かれ道を右の方に歩いて、クラウスは帰って行った。

## 負けとはなにか

家に帰ってから、パディンはクラウスの言葉を思い出していた。

『そもそも負けるってどういう意味なんだろうね』

負けるとは何か勝負をして相手に負けるという意味だとパディンは認識していた。だから集団で一位にならないといけないと思っている。

でもそれはとても過酷であることに、パディンは気づいていた。この間の給食の早食いも、そんなに食べるのが早いわけではないのに無理して、体調を崩していた。人には向き不向きがあることを、なんとなく理解していた。

その中でオールジャンルで一位になるなんて、無理だと思っている。クラウスのような天才のような人もいるが、クラウスとは違っているとパディンは気づいていた。

それよりも、自分が得意な走りなどのスポーツで一位になった方が、はるかに達成しやすい。それでも、走りで一位を取り続けるのは難しいだろう。これからもっと成長して大きな学校に行くことになれば、ライバルはもっと増えるだろう。そんな中ナンバーワンの座に君臨し続けることの、その過酷さはもっと厳しいものになるだろうと予想がついた。

そもそも一位にずっと君臨する必要があるのか。そんな反論が、パディンの中では発起し始めていた。

つまり、負けなければいいのではないか。

例えば勉強の話になるが、テストで毎回100点を取るのは至難の技だ。しかし赤点を取らず平均点くらいを取るの、それほど難しいことではない。

赤点を毎回取って勉強に追いつけなくなるのはまずい気がする。この状態を「負け」と仮定すると、そうならないようにするのは、さほど困難ではなく、努力の範囲で達成できる気がしてきた。毎回100点を取るの、難しいが、毎回赤点を取らないようにするのは結構簡単だと思えてきた。そして自分の得意な走りの分野で、楽しく成績を伸ばせばいい。それが例えナンバーワンではなく、上位10%には入るだろう。それであれば御の字ではないか。

パディンは負けない戦いをする分野と、勝ちに行く分野の違いを、子どもながらに少し理解したのだった。

## 第10章 理解されないクラウス

### てつがく 哲学的なクラウス

クラウスは子どもの頃から、少し思考が変わっている少年だった。この星はなぜ生まれただろう、とか、どうして自分は生きているのか、この星の外はどうなっているんだろう、と、いわゆる哲学的なことが好きな少年だった。

それを大人に聞いたところで、大体、「そんなのわからないよ」とか、「そんな意味のないことは置いておいて、勉強しなさい」とか、そういったことを言われることがオチであった。

そのため、段々と、自分の考えは外に出さないようになっていった。どうせ話をしても伝わらないのであれば、そもそも言う必要もないという省エネ的な考え方になっていってしまった。

それでもクラウスの中では、哲学の宇宙が頭の中に広がっていった。どうしてみんな、苦しい顔をして働いているんだろう。そもそも好きとか得意ってどう言うことなんだろう。おそらく答えがないことに対し、クラウスは自問自答じもんじとつを続けているのであった。

## クラウドとケイ

そんなクラウドだったが、教師のケイはまともにその問答に答えてくれるから、クラウドとしては嬉しかった。

ある日のことであった。クラウドはある問いをケイに投げかける。

「ケイ先生。僕は不思議でしょうがないんだけど、人間はどうして生きているんだろう。そもそも人間ってなんなんだろう」

大人にそんな質問を浴びせかけたら、「この子は面倒なことを聞くな」と思われ、しかめっつらをされたであろう。

しかしケイの場合は違う。少し驚いた顔をして、クラウドに答えた。

「クラウドは、どう思うんだい？」

クラウドは少し考えてから答えた。

「うーん、別に理由なんて、ないと思うんだよね。たまたま生き物というのがこの星に誕生しただけで。それが進化して人間にまで行き着いたんだろうけど、そもそも生きることの意味なんてないと思うんだよね」

「なるほど、確かにそうかもしれないね」

と、こんな調子だ。あくまでケイは問いに対し答えるのではなく、その問いを相手に返すことで、相手の考えていることを吐き出させるのが上手であった。

それにその日はこういった悩み事の相談までしていた。

「先生、こういった会話、先生にだったらできるけど、なかなかクラスの人に言っても、何言ってるだ、みたいな顔をされて、あんまり会話にならないんだよね。どうすればいいと思う？」

そんな問いに対しても、いつものやり方でケイは答えた。

「クラスとしては、そういった問いについて喋れる友達が欲しいってことなのかな」

「そう、そうなんだと思う。こう言いたいわけゆる哲学的な内容に対して、取り合ってくれる仲間みたいなものが欲しいんだと思う」

そうか、と言ってケイは少し考えてからこう答えた。

「これは予感でしかないけど、そう言った友達はきっと巡り会えると思うよ。でもそれには一つ条件がある」

「条件？」

身を乗り出すクラウドに対し、ケイは話し始めた。

## 発信し続けるという人と<sup>はっしん</sup>

「それは、クラウドがそういった哲学的な問いが好きだってことを、発信し続けることだね」

「発信し続ける・・・」

ちょうどその日は教室に二人だけ残って話をしていたのだが、ケイは立ち上がって、黒板に「発信」と書いた。

「そう、クラウドはこういうことに興味があるんだ、ということを外に知らせることだ。

人間は、エスパーではない。どうしても言葉に出さないと、伝わらないことが多い。他人だったら尚更だね。

だから、クラウドは言葉が喋れたり、字が書けたりするのだから、そういった手段を用いて、自分はこのように興味があります」ということをアピールする必要があると思うんだよね」

なるほど、とあって、クラウドは聞いていた。そしてケイはこう続けた。

「これは神話の一つなんだけど、昔、時をさかのぼれる装置を古代人は作ったらしいんだ。そしてそれを自分の家に隠し、ある限られたメンバーだけで使って、過去にさかのぼって遊んだりしていた。

そんな素晴らしい世紀の大発明だが、もちろん隠し通していたので、誰にも見つからなかった。

だけど、そのメンバーの一人がその秘密をつい外部の人間に喋ってしまった。

そうなったらもう大変。時をさかのぼれる装置欲しさに、それを隠していた家に多くの人が詰めかけてしまい、結局その装置は奪われてしまった。

ここから学べることはなんだと思う？」

聞かれたクラウドはこう答えた。

「秘密は守らなきゃいけないってことですか」

「そう。逆にいうと、秘密は誰にも言わなければ誰もわからない。口に出さないとわからないってことさ。」

この場合は秘密を漏らしてしまったけど、論理上、誰も話さなければ秘密は守れたはずだ。口に出して話してしまえば伝わるとも言えるし、口に出さないと伝わらないってことさ」

またクラウドは考えてから話した。

「つまり、思ったことで、伝えたいことがあったら、口に出して伝えようってことですよね」

うなづき、ケイは言った。

「そうなるね。以心伝心なんていう諺があるけど、口に出して伝える方が確実ではあるね。あとは……」

そう言って、ケイは黒板に「続ける」という字を書いた。

「続けることが、非常に重要だね。クラウドが哲学的なことが好きってことを一週間しか言わなかったら、それ以降に出会った人は、クラウドが哲学好きだってことを知らずに終わってしまう。だから、言い続けるってことが非常に重要なんだ」

それを聞いて、こうクラウドは反論した。

「でも先生。言い続けるのって難しくないですか。ずっと哲学好き、哲学好きなんて言っていたら、それこそ、みんなから嫌われてしまいます」

その悩みに対し、ケイは回答した。

「別に四六時中、好きだ好きだと言えと言っているわけではないんだ。発信は口で言うだけが全てではない。たとえば哲学のことをまとめた本を書いてもいい。そう言った自分の好きなことをアウトプットし続けることが大事なんだ」

「なるほど、先生の言いたいことがわかってきた気がします。要するに、自分が好きだったら人からなんと言われようと、その行為を続けるってことですかね」

鋭くついでまとめてきた生徒に対し、教師ケイは満足げな顔をして答えた。

「そうだよ、クラウド。今は仲間がいなくて寂さびしいと思う。でもこの世の中は広い。きっと君と同じような人がいる。その人に出会えるまで、君の好きすきはやめないであげて欲しい。その君が送った信号は続ければ誰かが拾ってくれる。長い時間がかかり、時には絶望する時もあるかもしれない。

だから誰かと繋つながりたいたいと思っても、それは相手次第のことだから、叶こうかどうかは難しい。だったら自分が好きでしようがないことを、自分のために続ける方が、精神衛生上せいしんえいせいいいと思うね」

「そう思いました。繋つながりたいたいと思うのは人間の本能かもしれませんが、どうしても他人頼りなので、ゴールが見えない気がします。であれば、自分の興味がある分野を、自分のために続けて、もしそれに関心を持ってくれる人がいればラッキーくらいの気持ちでやった方がいい気がします」

クラウドはケイに相談する前より、かなり気持ちが回復したようで、元気になって下校して行った。

## それぞれの悩み

クラウドが帰ったあと、ケイは職員室に戻り、自分が受け持っている十人の生徒のことを振り返っていた。

みんなそれぞれ子どもながらに悩みを持っている。

自分の正義が通らず悩む子。

自分を責めがちな子。

責任を取りたがらない子。

頑張って自分を変えようとする子。

夢をあきらめず、もがいている子。

完璧主義な子。

自分の好きがわからなくなってしまっている子。

うまくコミュニケーションができない子。

負けず嫌いな子。

周りから理解されず苦しむ子。

みんな悩み、そして戦っている。

ケイは自分を振り返り、この子たちになにかできているかを問答してみた。アドバイスや相談はしているつもりだが、同級生みんながそれぞれお互いの相談に乗っていることが見ていておもしろかった。

全く性格の違う二人が揃うと、案外お互いの悩みを話し、解決しているのが興味深かった。同じような性格が集まるより、少し口論こうろんになってしまいが、タイプの違うもの同士が集まった方が、化学反応が生まれるのかもしれない。

十人のみんなはこれからも色々な悩みを抱えつつ、自分の人生の中で戦っていくのだろう。ケイはそれの手伝いをするとともに、それらに寄り添そうことで、生徒たちの人生を応援していくつもりであった。